

## 未曾有の災害とデータサイエンス

総合情報基盤センター センター長 柴田 啓司

元号が平成から令和に変わって、新しい時代の幕が開きました。そして令和 2 年は、TOKYO 2020 オリンピックの開催で、ものすごい数の訪日客、そして熱狂が日本を包み込むはずでした。

しかし今、コロナウイルスの嵐が世界中を吹き荒れています。感染者数数十万人、死者二万数千人などと、連日ものすごく数字が増えていっています。

TOKYO 2020 オリンピックは、1 年先へ延期。大友克洋による 30 数年前の漫画「AKIRA」が予言した 2020 東京オリンピック。まさか「中止だ中止」までが的中するかもしれないなど、誰が予想できたでしょうか？

これらの報道を TV 等で見てみると、よく出てくるのが「データ」です。「数字」で表された「数値」。感染者数、感染率、死亡率などなど、さまざまな数値がその値に意味を持って出てきます。その数値においても、検査数が少ないから、おかしいのではないかとデータとして正しくないのでは？ある国からの数値は、本当に現状を表しているのか？すべてを検査することで、正しい行動になるのか？数字だけを見ていると、ただただ恐ろしくなります。

数値の意味を正しく読みとること。「自分は大丈夫」「自分は罹らない」など科学からほど遠い思い込みではなく、「人の移動の率が少し変わるだけで、どれくらい感染者増が変わるのか」等、正しく理解できるようにならなければなりません。

これらの数値は、わかりやすく「グラフ」で表現される場合もあります。視覚的に多くの視聴者にわかりやすく説明していますが、中には「おかしなグラフ」を出して、世論の誘導に用いられる場合もあります。このような情報操作も日常茶飯事で、フェイクニュースも広く流れるようになってしまった現代において、教養としてのデータサイエンスという言葉が、高等教育機関において声高々に叫ばれています。

Wikipedia によると、データサイエンスとは、「データを用いて新たな科学のおよび社会に有益な知見を引き出そうとするアプローチ」と記載されています。データサイエンスの社会的役割、データサイエンスのための数学的・統計学的な素養、データサイエンスの技術・手法、コンピュータを用いてのデータ分析の初歩から応用まで、世の中で求められている数値・データサイエンスと、大学生が実際に学んでいることには差が大きいイメージですが、文系理系を問わず、データサイエンスを広くそして深く理解していくことは、今後の人材として要求されていることです。

今回のコロナウイルスにより、世界は近年経験してきたことのない状況になっていくと思われる。その中で、データサイエンスを学び、正しい数値を入手する方法を理解し、それを正しく解析できる人材として、自分たちの未来を変えていくことにつなげていかなければなりません。

現在の高速なコンピュータとネットワークを用いた、ビッグデータ解析、人工知能(AI)の技術の急速な発展により、車の自動運転や、スマートスピーカーによる音声認識・音声合成そして会話、RPA による働き方改革など、人の仕事も単純作業がロボットに置き換えられていき、今後 10 年で人間での仕事なくなる業種ランキングなど、人間社会も大きく変わろうとしています。

総合情報基盤センターも、2019 年 3 月に新システムへの更新を行いました。今回の更新では、予算も限られる中、大学構成員の皆さんがより安心して、さまざまな授業や研究等で安心して利用できるよう、さらには、データサイエンスにも活用いただけるよう、ソフトウェア等も充実させております。

しかしながら、学内情報システムの安全な運用には、一人ひとりの協力が不可欠です。今後とも、総合情報基盤センターの活動に、ご理解ご協力のほど、よろしくお願いいたします。